

石巻市網地島 島の生業を支える 「小漁」の漁師たち

本誌編集部

JR石巻駅から網地島・田代島へと渡る船の臨時発着場、石巻工業港に向かうタクシーの中でのこと。

「島に行くの？」

「ええ、網地島に」

「あの辺、いま、ギンザケが釣れてるんだよね。遊漁船も出てるみたいだし。

私も震災前は釣り船やっててね。船が三隻ともやられちゃって、タクシーの運転手やってる。丘にあがったカツパだよ。船があつたらギンザケ釣りにお客さんを連れていくんだけどなあ」

もしかして、そのギンザケは、網地島の養殖いけすから逃げ出したギンザケ……。だとしたら、さぞかし釣れることだろう。

網地島の養殖ギンザケを取材したのは三年前。網地島を含め、宮城県は養殖ギンザケの主産地である。国内生産量の九割以上を宮城県産が占めるほどだ。昨年の生産量は県全体で約一万二〇〇〇トン、養殖漁業者は約八〇人。なかでも女川が生産量、生産者とも最も多い地域だった。その女川が津波で甚大な被害を受けてしまったいま、県内のギンザケ養殖は壊滅的な打撃を受けたとも言われている。

ギンザケの養殖いけす、一六基を流失

石巻と網地島・田代島を結ぶ網地島ラインは、旧北上川の河口港が津波で被災したため、石巻工業港が臨時の発着場になっていた。九月上旬現在で就航しているのはカーフェリー「マーメイド」のみ、一日二便態勢（震災前は三便）である。

網地漁港も津波の被害にあい、地盤沈下も著しく防波堤は陥没したままだが、付け根に近いほうの一部を持ち上げ、八月二〇日からここに船が着岸するようになった。津波で崩壊した港周辺の家屋は手つかずの状態だが、瓦礫などの撤去はかなり進んでいるようだ。しかし、島南東部の長渡漁港は、ほとんど改修がなされていない。津波と地盤沈下の影響で、防波堤も海に陥没し、港全体がため池のようになっていた。防波堤の付け根に建っていた漁協の事務所は、一階部分は津波で流され、二



防波堤の一部を底上げし、船が着岸できるようになった網地漁港。



港全体がため池のようになってしまった長渡漁港。

階部分も度重なる余震で天井や床が崩壊し、立ち入りできない状態。そのため、高台にある長渡集落内の元駐在所の建物に事務所機能を移転していた。「ここは、どこからも海が見えない。常に海を見ながら仕事をしてきたから、なんだか変な感じですよ」

と語るのは、宮城県漁協網地島支所長の阿部敏和さん（五一歳）。三年前、網地島の養殖ギンザケを取材した際にもお世話になった阿部さんに現状を聞いてみると、「一六基あつた養殖いけすは、すべて流失しましたが、四人の生産者、それぞれの船は無事です」。

網地島の養殖ギンザケを取材したきつかけは、量販店における鮮魚需要を調べたことが、そもそもの始まりだった。東日本を代表する量販店のひとつ、㈱イトーヨーカ堂が網地島産の養殖ギンザケを全量買い上げ、全店舗で販売しているという話を聞き、現地取材をさせてもらったのだ。四人の生産者それぞれが生産履歴をしっかりと取り、いけすの環境整備、飼料の管理なども徹底的に行っていた網地島の養殖ギンザケは、県内でもトップレベルの品質を誇っていた。ゆえに、イトーヨーカ堂のバイヤーの目にとまったわけだが、三年前に訪ねたとき、養殖いけすは確か全部で一三基だったはず。

「昨年から増やしたんです。以前は四人の生産者のうち、三人のいけすは三基ずつでしたが、一基ずつ増やして一六基にしました。イトーヨーカ堂さんから増産の希望があったので、それに応えられるようになった矢先の被災だったんです」

さらに時期も悪かった。養殖ギンザケは一月に稚魚を業者から購入、養殖いけすに移し、一尾が一・二キロぐらいに生長する四月下旬から八月にかけて出荷される。つまり、震災のあった三月一日は、出荷を約一ヶ月後に控えたギンザケたちが養殖いけすのなかを元気に泳ぎ回っていたのだ。投入した資金は稚魚の購入費約一六〇〇万円、飼料代一七〇〇〜一八〇〇万円。

「それらが、すべて海に流された。昨年の出荷量は七二〇トンほどです。今年も同じくらいの出荷量を見込んでいたんですが……」

ただ、幸いにも生産者それぞれの船は無事だった。稚魚の業者も被災を免れ、女川にあったギンザケの加工工場も一部再建の目処が立っている。生産ラインが健在であることを受け、網地島では今年一月から稚魚を購入し、養殖に着手する予定だ。

「まずは各生産者が三基ずついけすを設置して、一二基から始めます。通常

なら一基に四トンの稚魚を入れますが、今回は三トンにするつもりです。海の状態も定かではないし、購入資金の問題もありますから。一基に三トンでは採算ベースぎりぎりのラインですが、とりあえず動いてみようと話合っているところです」

稚魚の購入費だけでなく、養殖いけすを一基新調するには三〇〇万円ほどかかる。そのため資金調達が差し迫った課題であるが、さらにクリアしなくてはならないことがある。網地島のギンザケはイトーヨーカ堂のオリジナル食品「顔が見える食品」シリーズのひとつ。その名称からも分かるように、当シリーズのウリは、生産者の顔が見えること。そのため、網地島の場合も各生産者がそれぞれに養殖管理し、水揚げ後の加工ラインも各生産者ごとに別けられ、店頭で販売されるときはラベルに生産者の似顔絵が添付される。同じ島であっても、各生産者が互いに切磋琢磨しながら良質のギンザケをつ

くるというスタイルだったが、当面はリスクをできるだけ抑えるため、四人が共同で養殖に取り組むという。

「ですから個人の似顔絵を添付することができなくなるでしょうね。四人の集合似顔絵にするとか、イトーヨーカ堂さんの理解を得ていかななくてはなりません」

漁船の確保が 漁業復興の鍵になる

網地漁港、長渡漁港とも津波の被害にあった網地島では、漁船の多くを流した。震災前の漁協組合員数は網地地区約八〇人、長渡地区約一八〇人、所属漁船は一三〇隻ほど。この内、六隻が流失。残りも半分近くが船外機を失うなど修理が必要だが、今回の震災では宮城県全域の漁業地区が被災しているため、メーカーの製造が追いつかず、船外機ひとつ発注しても納品がいつになるか分からない状態だという。「網地島では一月からアワビ漁が解

禁になるので、それまでに船外機や船を手に入れたという人が多い。漁協としては来年春ごろまでには揃えたいと思っっているのですが難しいかもしれません」

可能な限り早期の漁船確保に向け、県漁連では漁船を喪失した漁業者に新造したい漁船の型やトン数などをアンケート調査し、そのデータを集計。型やトン数ごとにグループに別け、まとめてメーカーに発注することで製造ラインの簡略化を図ろうとしている。建造費の捻出には水産省の補正予算事業「共同利用小型船舶建造事業」を導入。これは建造費の三分の一を国、三分の一を県、三分の一を地元漁協が負担し、五年間漁協が船主に対して船をリースするというかたちをとる。船主はこの五年間で漁協が負担した金額を返済することで船を正式に入手するという流れだ。五年間の猶予が与えられるため、自己資金の乏しい漁業者でも船をつくることのできるわけだが、網地島の場

合は、この五年間がある意味で足かせにもなっている。理由は漁業者の高齢化だ。

養殖ギンザケに従事している漁業者は後継者も育っており、年齢も三〇代

から五〇代と若手だが、島の漁業者の多くは六〇代以上、なかには八〇代の人たちもいる。もし船の建造までに数年を要するとしたら、いま七〇代前半の人は七〇代後半にかけて建造費を支

払わないといけない。船の建造がいつになるのか分からない現状では先が読めず、漁業を断念せざるを得なくなる人も出てくるだろう。

「実際、いま八〇代の漁業者のなかには諦めている人もいますね。六〇代以上の漁業者の場合は年金を受け取りながら漁業に従事している人が大半なので、出漁しても自家消費用でアワビ漁のときにしか出荷しない人もいますが、たとえ漁業収益は少なくても、この世代の漁業者たちが島の漁業を支えているんです。ですから、とにかく早く船を入



網地島支所長の阿部敏和さん。後ろに写っているのが半壊した漁協の事務所。

手したいというのが私たちの共通の願いです」

「小漁」は生業でもあり、 生きがいでもある

年金を受け取りながら自家消費も含めて海に出ている漁業者の漁のことを島では「小漁」と呼んでいる。長渡地区に暮らす奥田誠意さん（七五歳）も、そんな小漁を営む漁業者だ。震災当日は津波から船を守るため、地震がおきてからすぐ船を沖に走らせた。

「とにかく波を避けながら南に向かって逃げた。津波の威力はすごいよ。水深が三〇メートルぐらいある場所でも海水がひいて海の底が見えるくらいになったからね。海水が急にひいて酸欠状態になったのか、タラヤスズキやメバルやイシモチが海面にバラバラ浮いてきた。それもみんなデカイ！ 見逃すのもつたいないから、タラとスズキをタモですくって帰ってきた。一・五メートルぐらいあったかなあ」



「小漁」の老漁師、奥田誠意さん。

津波が来襲するなか、船を沖出しするだけでも勇気がいるだろうに、大物を手土産に持ち帰るとは、なんとも豪快な人である。その豪気も海が育んだ気質なのだろう。二〇歳から遠洋漁船

に乗り込んで世界各国の海を渡り歩き、五〇歳を過ぎてからは貨物船の船員に。六〇歳のとき島に帰って来たという。小型の船外機船を購入し、いまは一年を通してさまざまな魚種を狙う。一二月から二月にかけてはタラヤカレイ、三月から九月はシヤコエビのほか、メバルやアイナメなどの小魚類、そして一〇月から一月にかけてはイクラをとる白サケを追う。

「網だけで七種類ある。震災があつてから漁には出ていなかったけど、九月一日から鮎川の市場が開いたからね。一〇月になったら漁を始めようかなと思ってる」

鮎川の市場とは牡鹿漁協の産地市場のこと。漁船なら網地島から五分ほどで行けるため、隣の田代島の漁業者も

この市場に直に水揚げすることが多い。牡鹿漁協も津波で被災したが、漁協の人に確認すると、市場前の岸壁を一部修繕し、漁船が着岸できるようにしたという。震災前に比べると二割ほどの水揚げ量だが、徐々に漁業を再開し始める人がいるようだ。

「島に帰って来たところに比べると、獲れる魚の量は減ってるし、市場に出しても値段が安い。それでも暮らしのたしになるし、海に出るのは愉しみだな。夕方に網やカゴを仕掛けて、翌日の朝四時ぐらいには船を出して、午前中までに市場に水揚げする。そうやってからだを動かしているのが健康の秘訣にもなるし。それに、漁業は技量が試される。腕次第で結果も変わってくるところが、またおもしろい」

船に乗っている限りは現役。奥田さんにとって漁業は生業であると同時に生きがいであり、他の小漁の老漁師たちも同じに違いない。その術を奪ったのが今回の震災である。漁業復興の

掛け声のなか、網地島のような小漁はややもすれば埋もれてしまいがちな小さな存在かもしれないが、小漁の人たちがいてこそその島であることを忘れてはいけない。

自家菜園から 島の農業を模索

網地地区で区長を務める桶谷敦さん（七〇歳）に、網地島の復旧状況を聞いてみた。震災以降、途絶していた上水道は五月中旬に、電気は海底ケーブルが七月中旬に復旧し、基本的なライフラインはほぼ元通りになったという。「ただ、固定電話の通話状態があまりよくないですね。雑音が多くて、相手の声聞き取れないこともあります」

桶谷さんも奥田さんと同じく、島にUターンして小漁を営むひとりである。妻の泰子さん（六六歳）とともに島に戻ったのは九年前、それまでは重量物を運ぶ商船の船員として働いていた。母親の介護が島に戻るきっかけとなっ

たが、元々釣り好きだったこともあって、定年後は島で小漁をしながら暮らしたいと思っていたそうだ。

「市場に出すのはアワビがメインです。長渡ではアワビは潜水漁で獲りますが、網地では船上から箱メガネでのぞいて、鉄製の棒でひっかけて獲る。他にウニやタコ、小魚類も釣りますが、自家用か、たくさん獲れても近所の人に配ったり友人に送ったり。ヒジキも評判がいいんですよ。網地島のヒジキはうまいっ！ てね。そうやって喜んでもらえるのが一番うれしいかな」

泰子さんによると、ヒジキは下処理が肝心だとか。しっかりと流水で洗ってから茹でて干すことで、長期保存してもおいしいヒジキに仕上がる。そんな季節ごとの漁を楽しんでいた桶谷さんの船も津波で流された。数日して網地漁港の隣の白浜海水浴場に運よく流れつき、岸に引き揚げたが船外機は流失。船体は無事だったので、いまは新しい船外機が届くのを待っているが、



網地区長を務める桶谷敦さん。

いつ届くかは分からない状態だ。

漁船を失った漁業者の多くは、現在、瓦礫撤去の仕事に従事している。作業は週五日、支払われる日当は一万二一〇〇円。ただ、この日当の支給は、九月いっぱいまで終了するかもしれない。

「支給の継続を要望していますが、いまの段階ではどうなるか分かりません。日々の収入を確保することも大切で

が、これまでに取り組んできた島づくりの事業が、この震災で途絶えてしまうことも心配です。例えば二年前からアワビのエサ場を増やすために立ヶ崎の沖でコンブの養殖を始めていますが、これもゼロからのスタートになるでしょうね」

八年前から夏に、都会の子どもたちを島に招いて自然体験をさせる「あじ島冒険楽校」、桶谷さんの

声かけで始まった養護施設の子どもたちを対象にした自然学校も今年の開催は見送った。すべてがリセットされてしまった感もあるが、震災を経て、改めて気づいたことも多々あるという。上水道が途絶しても、島には真水を供給してくれる井戸があったり、生鮮野菜が船で届かなくても、庭先の自家菜園で日々の野菜を賄うことができた。島には



桶谷さんの畑にて。夫婦二人では食べきれないほどの収穫がある。

暮らしそのものの底力があつた。

「わが家も含めて、島の人たちはほとんどどの家で自給用の畑を持っています。だからね、最近は農業もおもしろいかなと思っっているんですよ。島ならではの主力になる作物をつくれれば、漁業に続く産業になるんじゃないかなって」

見せてもらった桶谷さんの畑も見事だった。品種を工夫し、播種時期をずらすなどして、一年を通して何かしら収穫できる少量多品目の畑である。

農業では「定年帰農」という言葉が定着している。定年退職後に実家の農業を引き継いだり、新規就農する人たちも増えており、農業の一翼を担いつつあるのだ。桶谷さんのように、六〇歳を過ぎてから島に戻り、小漁を営む人たちは、「定年帰農」の言葉借りれば「定年帰漁」と言えまいか。いったん沖に出れば、生死にかかわる漁業は農業とは違っていると蹴されるかもしれないが、海と船があれば人は島に戻ってくる。そう思うってしまうのは的外れだろうか。

冬を迎えるまでに 長渡漁港の復旧を

網地島には定置網が四ヶ所ある。定置網用の漁船七隻のうち五隻は流失したが、網は無事だったため、八月から

金華山沖に網を一ヶ所設置した。残り三つの網も順次設置する予定だ。

養殖ギンザケも一二月から再開し、鮎川の市場が開いたことで出漁の準備に取り掛かっている漁業者もいる。島の漁業は復旧へと歩みを進めているが、その流れを止めないためにも漁港の整備が急務だろう。

先にもふれたように、長渡漁港の整備は未だ手つかずの状態だ。島には網地漁港、長渡漁港のほか、池ノ浜漁港と三つの漁港がある。この内、網地漁港は二種港、長渡漁港と池ノ浜漁港は一種港。宮城県では二種港はすべて復旧すると決定しているが、一種港は震災前の三分の一から五分の一に数を減らし、集約していく方針で進んでいる。そのため網地島の一種港も集約の対象となる可能性があるという。しかし、長渡漁港は石巻本土とをつなぐ網地島ラインの発着場でもある。とくにこれからの冬場は、季節風の影響で網地漁港に船が着岸しにくくなるため、長渡

漁港の復旧は欠かせない。本格的な冬を迎える前に、長渡漁港に船が着けるようになって欲しい、これも島の人たちの悲願である。

●
網地島から石巻へと戻る船上で、網地副区長の奥田長雄さんとお会いした。聞けば、これから石巻市内で、養殖のいけすから逃げ出したギンザケに関する会議が開かれるという。県全域のいけすから放たれたギンザケたちは岩手県などの漁業者の手によって釣られ市場に出されているとか。でも、元を正せば、このギンザケたちは宮城県の養殖漁業者のもの。そのため、ギンザケを水揚げした収益の一部を宮城県にバツクしてくれるよう要望するのだそうだ。ふと、網地島支所長の阿部さんの言葉を思い出す。

「いけすから逃げたギンザケたちに、あじ組なんていう名札が付いていませんかね」

これもまた、悲願である。